

Title	Political theory as 'vocation' or as 'vacation'? : 「レトリックとしての政治思想序論」
Sub Title	Political theory as 'vocation' or as 'vacation'? : an introductory essay of political theory as rhetoric
Author	菊池, 理夫(Kikuchi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1985
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.12 (1985. 12) ,p.26- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19851228-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Political Theory as 'vocation' or as 'vacation'?

——「レトリックとしての政治思想序論」——

菊池理夫

「われわれはなめらかな氷の上に迷いこんでいて、そこでは摩擦がなく、したがって諸条件があるいみでは理想的なだけでなく、しかし、われわれはまさにそのために先へ進むことができない。われわれは先へ進みたいのだ。だから摩擦が必要なのだ」。

ワイトゲンシュタイン『哲学探究』

一

本試論のタイトルは二つの論文、つまりS・S・ウォーリンの「職業 (vocation) としての政治理論」(一九六九年)と、L・D・スペンスの「休暇 (vacation) としての政治理論」(一九八二年)からとられたものである。⁽¹⁾前者は、当時のいわゆる「行動主義革命」の時代に、伝統的な政治理論、特に古典的な政治思想研究の必要性を擁護したものである。一方、後者は政治思想史の研究が現在の政治的現実から離れ、過去の政治理論を尊重する傾向を批判したものである。我々のように、政治思想史を「職業」とする者にとって、後者のいうように「休暇」中であるかどうかはさま

さまざまな反論がありえよう。我々も政治思想史家は「現代の政治的現実」とはまったく無縁な歴史研究を実際にしており、またすべきであるとは考えないが、政治思想史家の中でも、最近Q・スキナーのように、過去の思想、理論は過去のものとして、現在の関心とは無関係に研究すべきである、つまり思想の歴史的理解のみが、むしろ思想史家の「職業」であるという主張がなされている。

このスキナーの方法論については後に詳しく批判的に展開するつもりであるが、我々は、思想史研究においては、その歴史的研究も必要であるが、同時にその理論的研究も必要であると考える。確かに、歴史的研究は直接的には、現在の政治理論には「休暇」と思われるかもしれないが、我々の思想や制度というものが、当然歴史的に形成されてきたものであり、まったく現在の理論や制度とは無縁であるとは考えない。さらに、ある過去の思想がたとえまったく現在のものと無縁だとしても、そのことが逆に我々の思想や制度を相対化する視点を与えるかもしれない。次に、理論的研究であるが、我々は必ずしも過去の大思想家の思想のもつ普遍的な意義を探究することのみを「職業」とみなす必要はないが、少なくとも過去の思想を研究する場合、その思想のもつ現代的な意味や意義をまったく無視して語ることはできないと考える。そして、その場合、対象とする思想を我々の観点から理論的に再構築（あるいはより過激な立場からは脱構築と主張されるかもしれない）せざるをえないのであり、そのように構築された理論が当然、現在の理論に何らかの示唆は与えうると信じている。ともかく、このように政治思想史は政治史でもなく、哲学史でもなく、政治思想史家は歴史家であるとともに理論家でもあり、両方の関心が必要である²⁾。

もちろん、これだけではまだタイトルの問に対しての解答としては不十分であろう。そこで我々が実際の歴史的研究から生じてきた理論的問題を、ここでは主として政治思想史の方法について語りながら、できるだけ一般的なものとして提出していきたい。それは一言でいえば、レトリックとしての政治思想、さらには政治学を構築するための試みである。さて、我々はルネサンス・ヒューマニズムを中心として研究してきたが、その際、特にそれがレトリック

的伝統に属することをさまざまな形で明らかにしてきた⁽³⁾。そのレトリックとは現在のように狭い意味、時には侮蔑的な意味ではなく、古典古代において意味したように、哲学と対立するヘコトバ⁽⁴⁾に対する一つの総合的な技法であった。特に指摘したいのは、民主政下のアテナイや共和政下のローマにおいて総合的の技法として栄えていたように、都市生活や直接民主政と密接に関連した政治的、公共的、実践的の性格をレトリックがもっていたことである。もちろん、同時に現在ではそれがもつばら表現の意味にしかなくなっていないことからわかるように、多義的な比喻を用いて思想を表現していくための技術でもあった。ところで、後に詳しく述べるように、現在レトリック的なものがさまざまな観点から注目をうけているが、現在においても実際に政治で用いられる言語がレトリック的なものであるだけでなく、政治思想やさらには政治学もレトリックの性格をもつものとして、考えうることを主張していきたい。

以下の本論において、我々はまず、政治思想史の方法が転換期をむかえているのではないかと疑問を提出し、次に思想史の純粋な歴史的な理解は思想史の目的でもなく、實際上、不可能であることを明らかにし、さらに我々の考える方法とはいかなるものであるかを略述していきたい。そして、そのことが「現代の政治的現実」や理論に対して何らかの示唆を与えることを示したいと思う。ただ、我々は今まで主として歴史的研究を行ってきたのであり、その理論的、特に現代に対するその考察は初めてであり、ここでは文字通りのスケッチを示すだけに終わるであろう。

(1) S. S. Wolin, "Political Theory as a Vocation", *American Political Science Review*, vol. 63 (1969), pp. 1062-82; L. D. Spence, "Political Theory as a Vacation", *Polity*, vol. 12 (1982), pp. 697-710.

(2) Cf. J. G. A. Pocock, "The History of Political Thought: A Methodological Enquiry", in eds. P. Laslett, et. al., *Philosophy, Politics and Society*, Second Series (Oxford, 1972), pp. 183-202.

(3) 拙稿「レトリックと政治——ルネサンス・ヒューマンისტの政治思想」、『思想』一九八〇年四月、五八—七七頁、同「トピカと政治——ルネサンス・ヒューマンისტの方法」、『思想』一九八一年四月、一六〇—一七六頁、等参照。

(4) このことは日本の思想や哲学関係の雑誌において最近レトリックやメタファーが特集されていることから理解されよう。

『思想』一九八一年四月、『現代思想』一九八一年五月、『理想』一九八二年二月。

二

以下で述べる方法に関する議論は厳密な実証主義に立つ者以外には、それほど目新しいものでも、急進的なものでもなく、すでに大部分はいろいろな立場から主張されているものである。また、我々のめざすものは厳密な方法論を確立することでもなく、むしろ従来の方法における厳格さや一元性を批判することにある。というのも、我々は政治思想の方法に関しては、「すべて、行為に関する論述は、これを大まかに論ずべきことで、精確に論じない方が益が多い」というアリストテレス的な実践哲学の方法が有益だと考えるからである。この点では、現在ドイツを中心として実践哲学の復興が試みられているが、それがなぜ厳密な、あえていえばスコラ的な議論になるかわからない。また、我々は思想史の方法は対象とその解釈者によって変化する多様なものと考える。しかし、一つだけポジティブなことを主張すれば、多義的な言語表現を充分考慮に入れて思想を解釈する。実はこのような方法とはルネサンス・ヒューマニストが主張した方法、あるいは我々がそこから再構成した方法であると考える。しかし、我々はたんにその方法をそのまま復興しようとする者でもない。

我々の考えでは現在、学問は大きく変貌しようとし、それゆえに政治思想史の方法論も大きな転換期にある。というのも、思想史とは基本的に言語によって表現されたテクストの、あるいはそれを述べた思想家の、意味を説明し、理解し、あるいは意義を解釈し、それを言語を用いて記述するものだとすると、かつて自明とされた言語そのものがまさに現在、問題をもって我々に現われてきているからである。たとえば、英米における後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論やJ・L・オースティン等の言語行為論、フランスにおけるソシュール言語学等の影響を受けた構造主義やポスト構造主義、ドイツにおけるハイデガー等の影響を受けた哲学的解釈学さらには現象学の運動や記号論

等は新しい言語観、「言語論的転換」に基づく哲学、学問、思想であり、そこでは何らかの意味で言語の問題が中心的なものとなっている。これらに關しては我が国でも近年それぞれ研究がなされており、今我々がここで本格的に述べる必要はないであろう。⁽²⁾ただ、我々の関心からいえば、そこに何らかのレトリック的なるものへの関心があることを指摘しておきたい。たとえば、英米哲学における日常言語や語用論への関心、⁽³⁾またR・バルトやM・フーコーに認められる「意味するもの」(signifiant)やテクストの受け手の重視、⁽⁴⁾そしてなかなんぞH・G・ガダマーの解釈学ではヒューマニズムの伝統、それゆえにレトリックの伝統との結びつきをはっきりと語っている。⁽⁵⁾

ここでは、特にソシュールの言語観を丸山圭三郎の研究を参照して、この「言語論的転換」について簡単にまとめおきたい。⁽⁶⁾かつて言語とは思想を表現するためのたんなる手段にすぎず、また現実と言語とは別のものであり、存在するモノに対して名前がついている、あるいははつけるにすぎないという言語観があった。そして、現在でもそれは一般的であるかもしれない。しかし、人がモノを認識するのはあらかじめ言語によって世界が分節化されているからであり、しかもそれは日本語や英語のようなラングという文化的、歴史的な無意識の価値体系における差異化、関係によって意味をもつのであり、語自体に個有の実体的な意味があるのではない。つまり、その差異化は非自然的、社会的、歴史的、人為的、文化的なものであって、恣意的なものにすぎない。たとえば、無限に分割可能な太陽光線のベクトル——虹の色を七色にわけるのは何ら必然的ではない。それらは我々の日常言語に基づいて分割されるのであって、自然に七色があるのではない。⁽⁷⁾しかし、そのような恣意的なものが、我々の意識にとっては必然的なものとなり、また排他的なものとなる。このように言語によって指示されたものは実は言語によって作られた現実であり、その点で言語は表現であるとともに意味であり、また「意味するもの」と「意味されるもの」(signifié)、あるいは表現と思想は分離できるものではない。もちろん、言語以前、あるいは言語以外の認識と現実の可能性も否定されないが、少なくとも我々の文化は基本的にこのような言語的な性格をもつものとしてまず考える必要がある。そして、人

間の認識というものがあらかじめこのような言語によって社会化、歴史化されたものであることは、我々が政治や思想史を考える際にも重要な視点を与えるはずである。

たとえば、イデオロギーにしても、このような言語的なものと考えられないだろうか。つまり、イデオロギーとは一般にいわれているように、現実を隠す、あるいはその一部だけを切りとる虚偽意識であり、部分的意識であるが、しかし同時にそれは現実を変化させ、作り出していくものでもある⁽⁸⁾。しかも、K・マンハイムのいうようにあらゆる人間は「存在拘束性」をもつ、つまりすべての人間は何らかのイデオロギーをもつということは、我々は政治世界をイデオロギーという、永井陽之助の言葉を借りれば、〈象徴体系〉によってふつうは認識していることになる⁽⁹⁾。つまり、我々は我々の言語によって世界を見、行動していると同時に、我々は我々のイデオロギーによって政治世界を見、行動しているのである。もちろん、言語、特に日常言語はイデオロギーよりは根源的、普遍的なものであり、その点でより無意識的な「第一次的社会意識」である。これに対して、ふつういわれるイデオロギーはより意識的なものであり、「第二次的社会意識」であろう⁽¹⁰⁾。しかし、我々はイデオロギーをもつと無意識的なものと考えたいが、ただこの点ではむしろ神話と呼ぶべきかもしれない。ともかく、我々はイデオロギー的なものを広く解釈して、恣意的なるものが我々の意識に必然的なものとなることと呼びたい。

そして、この点で我々はイデオロギーと科学の区分というものもはや簡単に成立しがたいと考える。まず、政治の認識のためにはイデオロギー的認識は必要であるというより不可欠である。政治の科学において用いられる用語も日常言語、たとえば権力、利害、自由等の意味論からまったく自由でありえず、しかもその構文論も実際の政治世界におけるイデオロギーの語用論とはまったく無縁でありえない。つまり、実際の政治世界で行動する者はイデオロギー的現実、もちろん、我々の世界のような価値が多元化された世界ではそれは多元的、それゆえに特に多義的となる⁽¹¹⁾。——の中で行動している⁽¹²⁾のであり、そこでは言語は特に情緒的、説得的機能、つまりレトリック的機能をもつが、

永井陽之助のいうように、「現実の表象を離れて客観的に政治の世界を直接規定することは、やはり、一つのイメージの固定化を意味するゆえに、それ自体、ひとつの状況の規定になってしまう」(13) (強調・原著者)。その点で、W・E・コノリーのいうように政治言語、学問的なものも基本的に「論争的」である。(14) 結局、社会や政治をその外部に立って客観的に認識することは、政治的なものを理解できなくなるばかりか、自己の先入観、現代のイデオロギー、たとえば産業主義や科学主義を対象化できなくなる。この点は、後に述べる歴史的テクストとその解釈者の関係と同様になる。

次に、自然科学そのものも基本的には社会的、政治的な知であることが、T・S・クーンのパラダイム論によって主張されている。彼の主張で我々にとって重要なのは、自然科学もデータの収集は「自己の所信と先入観に合う、ある特別の部分だけを強調」し、科学言語も完全に中立的、客観的なものでないことを明らかにし、(15) また科学のパラダイムはそれを共有しないものを排除する「ヘネガティブ・パラダイム」の側面をもつことを示した点である。つまり、パラダイムはその内部の「通常科学」の研究者集団に我々が広い意味で呼んだイデオロギーとして機能する。また、人類学者、M・マーヴィックはパラダイム論に立拠して、我々の科学とアフリカ部族社会の魔術との少なくとも形式的類似性を主張している。つまり、両者とも権威に基礎を置く理論から仮説を立て、検証を行なうが、基本的命題をそのままにして、検証にあわないものは無視し、あるいは何らかの方法でうまくすりぬけていく。(17) このような科学観と別の科学観をもつ者にとっ、ぜ、ん魔術と科学との断絶は大きいであろう。しかし、科学が少なくともその前提を自明とし、それ以外のパラダイムを単純に非科学的として排除する時、魔術的なものと区分できなくなる可能性が内在化していることになろう。ともかく、我々も村上陽一郎のいうように、科学的言語も日常言語の束縛を受け、自然科学の判定基準も「ある時代ある社会全体の意味論的構造」によって決まると考える。(18) このように、我々は近代の実証主義がめざしたような客観と主観、事実と価値、記述的と規範的、科学とイデオロギー等の二項対立、

そして前項の優位はもはや単純に成立しないと主張したい。そして、このことは哲学者、廣松渉がいう物的世界像から事的世界像へ、実体主義的存在観から関係主義的存在観へのパラダイム・チェンジが現在、要請されていることと対応しよう。⁽¹⁹⁾

さて、このような前提にたつて我々の方法に関して述べていきたいが、まずその手掛りとしてQ・スキナーの方法論を検討していきたい。⁽²⁰⁾ 彼の方法論は英米において激しい賛否両論をまきおこし、J・ダンやJ・G・A・ポーコック等の方法論とともに、「新しい政治理論史」として議論されるまでに至っている。⁽²¹⁾ しかし、我々の考えでは、そしてスキナー自身も認めるように決して新しいものではない。それでも、彼の方法論には「言語論的転換」のある程度の影響が認められ、また我々の考える方法論とも類似した側面もある。スキナーの主張は基本的にはオースティンの言語行為論に基づき、あるテキストの言語行為者としての著者の意図を当時の言語的コンテキストの関連で、つまり当時の慣習 (convention) の基準の中で理解することが、思想史の課題であるというものである。⁽²²⁾ 彼はこの観点に立つて、まずテキストの内在的理解によってのみテキストを解釈し、その普遍的意義を探究する者を神話やアナクロニズムを生じさせるとして激しく攻撃する。⁽²³⁾ この点は、これまでの英米の政治理論家、L・ストラウス、E・フェーゲリン、H・アレント等のような、プラトンから始まりマルクスで終わるヨーロッパの政治思想の伝統——大思想家中心の古典のもつ普遍的な、特に現代への意義を探究する者への直接的、間接的な批判である。スキナーにとって思想史は個別の思想家の個別の陳述の個別の意図を探究すること⁽²⁴⁾ にあり、そこから普遍的な意義を引き出すことはできず、すべきではない。⁽²⁴⁾ 政治思想史は結局イデオロギーの歴史である。⁽²⁵⁾ 一方、彼はテキストをその直接的環境や社会的コンテキストによって説明する者も、確かにアナクロニズムを矯す点においては有効だが、マルクス主義やネーミア主義のように決定論におちいる危険があり、またそれによってテキストを説明しても理解することにならないという。⁽²⁶⁾ さて、スキナーの方法論に関して、我々も歴史的理解は素朴で単純なテキストの読解ではなく、哲学的、認識論的

考察を必要とする点⁽²⁷⁾（ただし、我々の立場は違うが）、また思想史がしばしば現代から見た普遍的真理や価値基準を過去の思想に押しつけ、アナクロニズムを生じさせることへの批判や歴史的研究を重視した点（ただし、我々は完全にアナクロニズムを除去できないと考えるが）、さらに思想理解における言語使用や言語表現の問題を重視している点（ただし、この点でも我々の立場に相違があるが）を評価する。しかし、我々の観点から次の三点を問題としたい。まず、思想史の目的に関して、彼のめざすものは思想のきわめて限定された歴史的な理解であるが、彼への批判者がしばしば語っているように、そのような理解はたんなる骨董趣味にすぎぬのではないか、またなぜ特定の時代の特定の思想家の特定のテクストを対象として選択するのかという問題を生じさせる。次に、彼はあるテクストの著者の意図を理解できると素朴に信じすぎている。この点では、スキナーはある思想家の他の思想家への影響を決定不可能といいながら、ある思想家の意図をその言語的コンテクストの中で決定可能ということと大きな対照をなしている。⁽²⁸⁾最後に、我々もテクストの理解がテクストの意味だけでなく、いかにこの意味を理解されるようにしたかも考察しなければならないという点は同意するが、しかし彼の言語行為論においては多義的な言語表現の問題を理論的にも、実際的にも充分考察していない。これらの点をもう少し詳しく述べていきたい。

まず、最初の点に関して彼は一応の解答を与えている。つまり、過去を過去としてとらえることは、その歴史的相対性を明らかにすることによって、逆に我々の相対力もまた相対的であることを明らかにし、その束縛からむしろ解放する効果があるという。⁽²⁹⁾また、対象として何を選択するかはまったく個人的なものであり、我々が合理的で意義あるものと判断する我々の基準からである。ただ、対象を選択した後では、我々は彼のいう歴史的探究に向かうべきであるという。⁽³⁰⁾我々は第一の点は過去を過去として理解することは困難、もしくは事実上不可能であるという留保をつけて同意しよう。しかし、第二の点では見解を相違する。我々の考えでは何かを対象として選択することはそれに対してかなりの関心があることを意味しており、それは研究の間も持続される。もちろん、関心が変化することもある

が、というより対象によって変化させられていくが、その時対象への視点は変化し、そしてその関心がまったく変化すれば、対象そのものが変化したというべきである。たとえば、スキナーがホッブスの思想を合理的で意義あるものとして、研究の対象に選び、しかしその後、当時の言語的コンテキストの中のホッブスの思想のイデオロギー的側面を重視した時、対象への視点が変化し、また対象とするテキストの意味そのものが変化したのである。その後にはスキナーが現代の意識を相対化したいという関心があったというべきである。また、逆にホッブスを西洋政治学の古典の伝統の中で理解しようとする者は、そのようなホッブスを彼のテキストの中に求めていこうとするであろうが、その理解のためにホッブスの時代のコンテキストの理解も必要であれば、その研究に進んでいくであろう。一般的にいえば、スキナーのいうようなコンテキストをまったく無視した政治思想史研究はありえず、なかったというべきである。ただ、この点に関してはスキナーへの批判者がいうように、ホッブスのような思想家は、後にスキナーが研究対象としたルネサンスや宗教改革期の思想家よりは直接、歴史的コンテキストに還元されにくいはずである。しかし、いずれにしても最初に主張したように、その研究がどう進むかは対象と研究者の関心によって規定されると我々は考える。しかも、後に述べるようにこの関心は決して個人的なものとも考えない。

次に、スキナーは思想家の意図にさまざまなものがあることを認めているが、それでもその主要な意図を当時のコンテキストの中から発見できると信じている⁽³¹⁾。しかし、我々は著者の意図を探ることが實際上、不可能であり、またそのことが思想史の目的でもないことを主張したい。我々もコンテキストから孤立した意味は存在せず、あるテキストの理解はコンテキストに依存すると考える。しかし、当時の言語的コンテキストのみに限定する必要はなく、コンテキストは無限に開かれたものであると考える⁽³²⁾。たとえば、スキナーのいうコンテキスト自体、言語行為としてのテキストであり、その意図はまたそのコンテキストに依存するという無限の循環になるであろう⁽³³⁾。また、いわゆる大思想家は当時の慣習的なものを超えた普遍的なものを、たとえそれが幻想だとしても、少なくとも意図としては当時の

コンテキストを超えた者として語っていることがある。⁽³⁴⁾ その場合、やはり伝統としての政治理論と政治言語のコンテキストが問題となるであろう。また、社会経済史的コンテキストも対象と関心によっては当然重要なものとなる。さらに、ある著者が主要な意図としたものが、彼のテキスト全体にわたって貫徹している保証はない。もちろん、スキナーは個別の陳述の意図が問題であるというだろう。しかし、その場合でもコンテキストは無数に存在することを認めなければならなくなり、また意図も無数に存在し、しかも何がテキスト全体の主要な意図とコンテキストであるかを一体的に判断すべきかの問題を生じさせる。ともかく、何を主要なコンテキストと考えるかは著者の意図と考えられるものだけではなく、この点でも解釈者の関心によって規定されると我々は考える。次に、思想家の主要な意図に関しても、スキナー自身、思想家が自分の意図に決定的な役割を果たすということを後に修正している。⁽³⁵⁾ 彼はそのことを例外的(寄生的)とみなすが、このこと自体、著者の意図の理解が思想史の課題と考えることを否定する根拠になりうると思う。つまり、思想家の言語表現は思想家の意図したことだけでなく、意図しないことも物語るのである。

次に、スキナーが言語表現についてどのように考えていたか述べていきたい。彼はオースティンが言語行為論から排除した冗談⁽³⁶⁾についても考察しているが、結局冗談であったと後でいうことはコミュニケーションの失敗、つまり語り手の意図を理解させるに失敗したことであるというにすぎない。⁽³⁷⁾ また、間接的表現やアイロニーも発語内行為(illocutinary act)として理解し、いずれにしてもコミュニケーションが成功している場合は、語り手の意図を慣習的なものの中で理解することが不可欠であると主張する。⁽³⁸⁾ しかし、冗談であったと後でいうことは最初の意図とは別の意図がある語り手において生じることであり、語り手の意図を単純に理解できないことを意味している。実際、冗談であったというだけでなく、語り手は自分の後の意図をさかのぼって前の陳述に含めることはしばしばおこりうる。また、このことは直接的コミュニケーションがつねに成功するとは限らないことを意味している。実際、思想史の対

象とするテキストでその著者が当時の人々とコミュニケーションしているとしても、それが成功しているとは限らず、後の時代の人間の方がよく理解できることはおこりうる。ともかく、すでに我々はモアの『ユートピア』の分析において、冗談やアイロニーはたんなる表現を超えて、もっと重要な意味をもつことを論究した。⁽³⁹⁾ また、言語表現の問題は後にメタファーについて述べる時にも考察していきたい。

さて、我々はスキナーへの批判を離れてもう少しポジティブなことについて語ろう。テキストであれ、コンテキストであれ、それが解釈者とはまったく別に客観的に存在するものとは我々は考えない。最近のテキスト理論や構造主義のように、著者の意図、語る主体というものを歴史的なものとして否定し、間テキスト的なものを重視するラディカルな立場をとらなくとも、少なくとも解釈者の役割をもっと積極的なものとして理解する必要がある。この点で、ガダマーの解釈学が参考となる。⁽⁴⁰⁾ つまり、我々はある対象とするテキストに対して「親密さ」と「疎遠さ」の意識をもっている。テキストは我々の関心によって選り出されたものであり、言語によって表現されたものである以上、それは理解しうるものであるとともに、それは時間的にも、空間的にも我々と「隔たり」があり、完全には理解できないものでもある。この点で、ガダマーのいう先入観、我々が関心と呼んできたものをもっと積極的に理解さるべきである。つまり、解釈行為においてまず出発点となるのは、あるテキストが意味をもち、それを理解できるという先入観であり、しかもそれは歴史的、文化的な伝統としての言語の営みの中にあるのであって、決して単なる主観的なものではない。また、素朴な実証主義のように、我々は空間的にも歴史的にも有限の存在であることを忘れて解釈することはむしろ先入観の中にとらわれていることになる。しかし、同時にその先入観はテキストのもつ「隔たり」によって、絶えず修正されていかなければならない。この点で、テキストと解釈者の間に解釈学的循環がある。ただ、我々はガダマーと違って、テキストと解釈者の間に「地平の融合」が成立するとはそれほど楽天的に語りえないと考える。ガダマーの場合、やはり基本的にはヨーロッパ形而上学あるいはもっと広くいえばヨーロッパ文化の伝統の一

貫性が前提にあり、それとは時間的にも空間的にもはるかに隔たりがあるものを対象とする我々のような者にとって、テキストは「親密さ」よりも「疎遠さ」をもって表われてくる。もちろん、我々も特に明治以後、このヨーロッパの伝統の中にす、で、いることも前提としなければならぬが、しかしこの伝統もできる限り相対化していくことも必要だと考える。この点では、R・ローティのいうように解釈学はむしろ時代の隔たりや文化の隔たりといった「共同不可能性」から出発し、それゆえにクーンという「通常科学」ではなく、変則的なもの（anormal）を啓発していく（edifying）ものと考えたい。⁽⁴¹⁾

ともかく、このことは対象とするテキストも、その時代の先入観やパラダイムによって制約されるところにも、同時にそれを超えようとする性格もあることを意味している。この点で我々はテキストのもつ資料性と作品性を一応、区別したい。⁽⁴²⁾ 資料性とはテキストの文字通りの一義的意味だけが問題となり、そのテキストが指示する「現実」に関する情報だけが問題となるものである。これに対して、作品性とは文字通りの意味もつねに著者の意図を裏切り、多義的となり、また「現実」を變形し、それを超えることをめざすものであり、そのことが問題となるものである。一般的に、そして特に思想史の対象となるテキストは両方の性格をもつ。前者に関してはとりわけ文献学的操作が必要となり、それを実証的に明らかにすべきである。我々はこの点で実証主義を否定するが、実証性の必要性は否定しない。ただ、その場合でも思想史において、そして一般的には歴史学においてもいいうると思うが、純粹に資料性だけの研究はありえない。つまり、そうだとすると、それはテキストをそのまま再現する資料集を提出する以外は不可能となる。もちろん、我々はこのような研究を否定しないし、むしろ必要だと考える。しかし、その場合でも、資料の一部を提出する時はもちろん、全部を提出する時も、なぜその資料が無数の資料の中から選ばれるかが問題となる。つまり、そこでも解釈が必要となり、またその再現は再現によって何かを表現している。ともかく、テキストの資料性に関して、スキナーのいうように慣習的なものの理解が必要となることはいうまでもない。ただ、我々の観点か

らはスキナーの行論はテキストのもつ資料性しか考察しない不十分なものである。

さて、作品性であるが、この点に関してはとりわけそれは解釈者に開かれたものである。というのも、作品性とはすでに述べたように〈現実〉を超え、それを変形しようとするものであり、我々はそれと対話してその作業を体験していかなければならない。また、ここでは作者の意図も直接の問題とはならない。ガダマーのいうようにゲームにおいて問題となるのはゲームそのものであり、それに参加することであるように、テキストの理解と解釈においても、著者の意図ではなく、まさに問主観的な「言語ゲーム」や対話として開かれたテキストそのものがまず問題である。⁽⁴³⁾

というのも、「テキストの意味はつねにその著者を超えているのであって、ある機会を超える時もあるというのではない。したがって、理解はたんに再現的な態度にとどまらず、つねにまた産出的な態度である」⁽⁴⁴⁾。同様の主張はすでに丸山真男が思想史の方法論に関して述べている。彼は思想史家を音楽における演奏家にとえ、たしかに楽譜そのものによって制約されるが、すぐれた演奏家はたんに楽譜を機械的に再現するのではなく、「追創造」を行う芸術家でもあるという。⁽⁴⁵⁾つまり、我々の言葉でいえば、テキストのもつ資料性に制限されるが、その作品性に関しては我々の解釈は重要な意味をもつ。我々はこの比喩をもっとおし進めて、たとえばそれほどはきりした指定がなく、即興演奏を認めるバロック時代のような楽譜もあり、また時には楽譜で指定されていない楽器、たとえばチェンバロの代わりに当時なかったピアノを使う名演奏もありうると主張したい。さらに、U・エーコが指摘するように現代音楽においては作曲者が初めから演奏者に大幅な演奏の自由を認める「開かれた作品」がある。⁽⁴⁶⁾

とはいっても、いずれにしても楽譜、テキストは必要なのであって、しかもそのテキストは資料性をもち、その点でテキストの歴史性の理解も必要である。実際、最近のバロック音楽では古楽器を用いる演奏がふえている。この点で政治思想史においてもアナル学派でいわれているマンタリテの歴史(心性史)も無視できないと考える。⁽⁴⁷⁾たとえば、P・アリエスのいうように、かつて、自然であり、不変と考えられていた人間性、子供や家族に対する我々の感

情は決してそうではなく、一七—一八世紀を境にして根本的に変化したとすら、それ以前の〈⁽⁴⁸⁾へ家族〉というものを我々の感覚で簡単に類推できなくなるはずである。このことはあるテクストの著者が直接コミュニケーションしようとしたことだけでなく、むしろそこでは意識されていない日常言語や生活世界、民衆の集合意識をも探究することになろうともかく、資料性と作品性に関しても、またスキナーのいうコンテクストとテクストに関しても解釈学的循環がある⁽⁴⁹⁾と我々は考へる。

最後に、我々は今まで述べてきた点を明らかにするためにも、テクストのもつ比喩的表現、特にメタファーの問題について考えていきたい。確かに、一義的な意味をめざす科学的な認識論においては比喩特にメタファーは多義的で、曖昧なもの、あるいは余分で虚偽的なものとして排除されてきた。すでに政治学に関してもホッブスは『リヴァイアサン』で次のようにいう。「論証や評議およびすべての厳密な真理の探究では判断力だけがすべてであるが、例外的時には何か適切な類比(imitudo)によって理解が開かれる必要がある。その際には想像が大いに有益である。しかし、メタファーに関しては、この場合完全に排除される。というのも、それは公然と虚偽であることを表明しているのだから」⁽⁴⁹⁾。しかし、よくいわれるように、ホッブス自身まさに国家をリヴァイアサンと呼び、それを機械にもたとえ、⁽⁵⁰⁾さらに彼が「適切な類比」と呼んだのも決して理解を開く際に、例外的なものではなく、後で述べるようにむしろ我々が広い意味でいうメタファー的なものである。

確かに、すでに述べたような言語論的転換にともなって、これまでたんなる比喩的表現とされてきたものが、もつと深い意味をもつことがさまざまな立場から明らかにされている。言語は有限な語彙から無限な表現を生み出すものであり、その点ですべての語は文字通りの意味と文字通りでない意味、つまり比喩的な意味をもちうるのであり、それゆえに多義的な性格がある。つまり、比喩的な表現とは我々が言語を用いる上で避けられないものであり、歴史研究⁽⁵¹⁾や政治思想においても、さらに科学においても、意識する、しないにかかわらず、比喩的表現は必ず用いられてい

る。特に、メタファーはふつうにはまったく異なるものを同一のものとして表現する意味論的創造性をもつものとして、さまざまな立場から注目されている。⁽⁵²⁾

さて、メタファーに対して新しい視点を提出したものとしてM・ブラックの「相互作用理論」がある。彼によれば、これまでの伝統的な考えは、メタファー的表現は文字通りの表現の代わりに用いられているという「代置理論」か、その特別な場合である、メタファー的表現は二つの言葉のアナロジーや類似を示すという「比較理論」か、いずれにしても、ここではメタファーはたんなる言葉の飾りか、直喩的なものにすぎなく、メタファーのもつ独自の特徴は理解できなくなるという。そこで、ブラックはすでにI・リチャーズによって指摘された点を強調し、メタファー的語と文字通りの意味をもつ他の語との相互作用によって、新しい類似を創造することが、メタファー的表現であると主張する。それゆえに、メタファーは文字通りの意味に代置できない新しい意味の創造、拡大をもたらすものである。この創造性をさらに強調して、真のメタファーとは文字通りの意味と比喩的な意味との間の緊張とか、類似の働きにおける同一と差異の間の緊張を説くP・リクルールのような「緊張理論」も主張されている。⁽⁵³⁾

ところで、ブラックによればメタファーは、より正確には彼が「祖型」と呼ぶ体系化されたメタファーは科学における「モデル」の使用と類似する。⁽⁵⁶⁾つまり、ともに二つの異なった領域を新たな関連によって見ることで、新しい発見に向かうものである。ただ、それが自己確信的な神話に終わる危険性もあると指摘されている。同様のことは、さまざまな論者によっても主張されており、この体系的メタファーはパースペクティヴ、アナロジー、ルート・メタファー等とも呼ばれ、新しい「モデル」の創造の際に用いられるとともに、それが「 \rightarrow として見る」⁽⁵⁷⁾の性格を失う時、危険なものとなるといわれている。政治学の中でも政治理論や政治思想におけるメタファーの問題が最近注目されている。そこでも、メタファーやその拡大されたアナロジー、シンボル等が既知のもの、慣習的なもの、経験不可能なものから、新しい政治理論を形成する際に、つねに使用されていることが指摘されているとともに、それが文

字通りの意味としてとられ、経験的な反証をうけつけない一面的なものとなる危険性も語られている。⁽⁵⁸⁾メタファーは「変則的なもの」であり、V・ターナーの言葉を借りれば「境界的な怪物」である。⁽⁵⁹⁾そして、ルート・メタファーの変化を語ることは、ある社会のパラダイムの変化を語ることもある。⁽⁶⁰⁾

また、このように理解されたメタファーは政治イデオロギーを考える上でも重要な視点を与える。つまり、すでに述べたように言語一般がそうであるが、とりわけ政治言語はレトリック的であり、多義的であり、論争的である。レトリック的、多義的、論争的であるということは、同一の語が、そしてそれから成立する文が類似とともに差異をもつからであり、そしてイデオロギーはある集団内においてその差異を情緒的に隠し、類似を同一のものと化す作用をするからである。しかし、このように神話化されたメタファーだけでなく、創造的メタファーは〈現実〉を作り出すものとしても、イデオロギーとともに考える必要がある。つまり、P・リクルのいうように、科学的、哲学的な概念は同一の王国であって、その点で普遍的なものをめざしえるが、しかし、差異にもかかわらず同一をとらえようとする意味論的力動性をもつメタファーと緊張を保持して「概念のレベルでもっと考えさせることへ飛躍させる」必要がある。⁽⁶¹⁾イデオロギーもマンハイムのいうように、部分的なもの「として見る」ことによって科学へと到達しうるであろうが、同時に我々の生活世界におけるイデオロギーと緊張を継続させることで、新たな認識の地平へと向かう必要がある。さらにいえば、科学によって主張された同一が隠している差異性や排除されたものが存在しないかどうか探究する必要がある。それゆえに、問題はメタファーやイデオロギーを用いて考えることの是非ではなく、それを自覚しているか否かである。そして、このことは丸山真男や福田歓一が指摘した、政治社会というものが人為であることをはつきりと自覚したヨーロッパ近代の認識⁽⁶²⁾のむしろ徹底化へ向かうものであると考える。

次に、我々は政治思想の方法を問題としてしているのであるから、メタファーの解釈の問題について考えていきたい。我々が述べてきたように、ある意味ではすべての言語なканずく政治言語はメタファー的であり、政治思想の研究は

メタファー研究であるというトートロジーを述べてもよいのだが、それだけでは何も説明したことにならないであろう。そこで、まず主張したいのは政治思想の研究においては、詩的メタファーの研究と違って、慣用的メタファー（たとえば「人間は狼である」）や時には死んだメタファー（たとえば「机の脚」も重要となる。この点で、ブラックのいう「連想常套句の体系」の理解が必要である。たとえば、狼の共示の意味（残忍、勇猛、鋭利等）の体系であり、それは文化や時代によって当然意味の異なるものである。その点で、それを述べた者の意図を知るためには、スキナーのいう慣習的な言語コンテキストの理解は必要である。しかし、ある同じ時代において同一のメタファーが使用されていても、それがまったく同じ共示の意味をもつとは限らない。また、我々が慣用的メタファーや死んだメタファーに関心をよせるのは、それによってあるテキストの著者の意図しないことも解釈できるからである。つまり、著者がメタファー的表现とは意識しなかった表現に逆に注目することによって、その著者の意識しない体系やそれから排除されたものを理解できると考えるからである。たとえば、我々はF・ベーコンの思想における〈自然〉や〈女性〉の位置に関してこのような試みを行っている⁽⁶⁴⁾。

次に、創造的メタファー、〈生きたメタファー〉は特に多義的なものであり、多義的に解釈されうる。そして、この点でも著者の意図しないことを意味しうる。ちょうど、詩におけるメタファーはそれを読むものの想像力の働きを強め、さまざまな連想を引き出すように、我々に「もっと考えさせる」働きをする。たとえば、モアのヘュートピアもこのような意味でのメタファー的なものと我々は考える。また、創造的なルート・メタファーはすでに述べたようにある時代から別の時代へのパラダイム・チェンジの研究に不可欠となる。意味論的革新をもつ多義的メタファーは境界状況において多く現われてくるからである。そして、我々が対象としてきたルネサンス期はとりわけこういう時代として考えたい。

さて、我々はレトリックへの関心は政治的なものへの関心と密接に関連し、そして政治思想の理解や解釈において

も重要なことをある程度明らかにしえたと思う。もちろん、我々はレトリックの復権やメタファーの創造性を説くことも、ヨーロッパの形而上学を超えるものにならないという批判も知っている⁶⁵。しかし、我々はレトリック的なるものを中心「として見る」ことによって、政治の、そして政治思想のどのような面が見えてくるか、あるいは見えてこないかを追求する必要があると考える。それは造語を用いれば、〈政辞学〉の可能性である。さらには、詩学としての政治学、〈政詩学〉の可能性を語ることもできよう。すでに、M・オークショットも一義的で真正の言語しか認めない〈科学〉に対して、まじめさと遊びが統一され、多義的で開かれた対話としての詩学をモデルとする政治学について語っている⁶⁶。そして、このようなまじめと遊びの統一をめざしたが、我々の探究してきたエラスムスやモアのようなルネサンス・ヒューマニストである。

- (1) この点に関しては、拙稿「トピカと政治」前掲論文、一六一―三頁参照。
- (2) ただし、我が国の政治学や政治思想史研究ではこの点について本格的に言及しているものは我々の知る限りないようである。さしあたり政治学との関連では、F. Dallmayr, *Language and Politics* (Notre Dame, 1984) をEd. M. Shapiro, *Language and Politics* (Oxford, 1984) 所収の諸論文、また思想史との関連についてはEd. D. LaCapra and S. L. Kaplan, *Modern European Intellectual History: Reappraisals and New Perspectives* (Ithaca, 1982) 所収の諸論文を参照。
- (3) ウィトゲンシュタイン「哲学探究」藤本隆志訳（大修館書店、一九七六年）、J・L・オーステイン「言語と行為」坂本百大訳（大修館書店、一九七八年）。
- (4) M・フーコー「言語表現の秩序」中村雄二郎訳（河出書房新社、一九七八年）、同「知の考古学」同訳（河出書房新社、一九八一年）、R・バルト「物語の構造分析」花輪光訳（みすず書房、一九七九年）。また、バルトには旧レトリック解体のためにはあるが、従来のレトリックの歴史や理論をまとめた「旧修辞学」沢崎浩平訳（みすず書房、一九七九年）がある。
- (5) H. G. Gadamer, *Truth and Method*, trans. G. Barden & J. Cumming (New York, 1975) pp. 10 ff.; 同「修辞学」解釈学「イデオロギー批判」『哲学・芸術・言語』斉藤博他訳（未来社、一九七七年）等。
- (6) 丸山圭三郎「シュニールの思想」(岩波書店、一九八一年)等。

- (7) この例に関しては、特に村上陽一郎『科学と日常性の文脈』（海鳴社、一九七九年）八七頁以下参照。
- (8) もちろん、K・マンハイム『イデオロギーとユートピア』高橋徹、徳永恂訳（『世界の名著』56）マンハイム・オルテガが中央公論社、一九七一年）、第三部では現実を変革しようとするものはユートピアと呼ばれているが、我々はここでは区別しないで考えていきたい。たとえ、イデオロギーが現実を隠すとしても、そのことによって象徴的現実も作り出していると考えられるからである。
- (9) 永井陽之助『政治意識の研究』（岩波書店、一九七一年）。
- (10) 「第一次」、「第二次」の言葉に関しては、P・L・バーガー、T・ルックマン『日常世界の構造』山口節郎訳（新曜社、一九七七年）、二二八頁以下、栗原彬『管理社会と民衆理性』（新曜社、一九八二年）六一頁以下参照。ただ、栗原は第二次の社会意識を第一次の社会意識から決定的にわかるものは〈支配〉であるというが、我々は村上、前掲書、一二六頁以下でいうように、日常言語自体が〈支配性〉をもつものとして考えたい。
- (11) もちろん、山口昌男『文化と両義性』（岩波書店、一九七五年）等でいうように、現代のみならず現実はずねに多元的である。
- (12) Cf. M. Edelman, *The Symbolic Uses of Politics* (Urbana, 1964); idem, *Politics as Symbolic Action* (New York, 1971); idem, *Political Language* (New York, 1977); J. G. A. Pocock, *Politics, Language and Time* (New York, 1971), idem, "Verbalizing a Political Act: Toward a Politics of Speech", *Political Theory*, vol. 1 (1973), pp. 27-45 (rep. in ed. M. Shapiro, *op. cit.*, pp. 25-43) etc.
- (13) 永井、前掲書、三三〇—一頁。
- (14) W. E. Connolly, *The Terms of Political Discourse* (Ann Arbor, 1983).
- (15) T・S・クーン『科学革命の構造』中山茂訳（みすず書房、一九七一年）、二〇—一四二頁以下等。
- (16) この言葉は米本昌平「ネガティブ・パラダイム論」、中山茂編『パラダイム再考』（ミネルヴァ書房、一九八四年）から引いたものである。
- (17) M・マーヴィック『魔術と科学の認識論』、同編『魔術師』山本春樹・渡辺喜勝訳（未来社、一九八四年）、三九三—四〇七頁。
- (18) 村上、前掲書、一八七頁以下。

- (19) 廣松渉『存在と意味』(岩波書店、一九八二年)。
- (20) スキナーの方法論に関する論文は、Q. Skinner, "The Limits of Historical Explanations", *Philosophy*, vol. 41 (1966), pp. 199-215; "Meaning and Understanding in the History of Ideas", *History and Theory*, vol. 8 (1968), pp. 3-53; "Conventions and the Understanding of Speech Acts", *Philosophical Quarterly*, vol. 20 (1970), pp. 118-38; "On Performing and Explaining Linguistic Actions", *Philosophical Quarterly*, vol. 21 (1971), pp. 1-21; "Social Meaning" and the Explanation of Social Action", in eds. P. Laslett et al., *Philosophy, Politics and Society*, forth series (Oxford, 1972), pp. 136-57; "Motives, Intentions and the Interpretation of Texts", *New Literary History*, vol. 3 (1972), pp. 393-408; "Some Problems in the Analysis of Political Thought and Action", *Political Theory*, vol. 2 (1974), pp. 277-303; "Hermeneutics and the Role of History", *New Literary History*, vol. 7 (1975), pp. 229-32
- (21) スキナーへの言及を含む方法論の言及が参照されたのは、M. Leslie, "In Defence of Anachronism", *Political Studies*, vol. 18 (1970), pp. 433-47; M. Levin, "What Makes A Classic in Political Theory?", *Political Science Quarterly*, vol. 88 (1973), pp. 462-76; C. D. Tarlton, "Historicity, Meaning, and Revisionism in the Study of Political Thought", *History and Theory*, vol. 12 (1973), pp. 307-328; B. Parakh and R. N. Berki, "The History of Political Ideas: A Critique of Q. Skinner's Methodology", *Journal of the History of Ideas*, vol. 34 (1973), pp. 163-84; "Political Thought and Political Action: A Symposium on Quentin Skinner", *Political Theory*, vol. 2 (1974), pp. 251-76; B. A. Haddock, "The History of Ideas and the Study of Politics", *Political Theory*, vol. 2 (1974), pp. 420-31; R. Aschcraft, "On the Problem of Methodology and the Nature of Political Theory", *Political Theory*, vol. 3 (1975), pp. 5-25; A. Lockyer, "Traditions as a Context in the History of Political Theory", *Political Studies*, vol. 27 (1979), pp. 201-17; D. Boucher, "New Histories of Political Thought for Old", *Political Studies*, vol. 31 (1983), pp. 112-21; J. G. Gunnell, "The Myth of the Tradition", *American Political Science Review*, vol. 72 (1978); idem, *Political Theory: Tradition and Interpretation* (Cambridge, Mass., 1979); idem, "Interpretation and the History of Political Theory: Apology and Epistemology", *American Political Science Review*, vol. 76 (1982), pp. 317-327; ed. P. King, *The History of Ideas: An Introduction to Method* (Totowa, 1983) 以下、この言及がスキナーへの激しい批判で、Leslie, Tarlton, B. Parakh and R. N. Berki, Lockyer 等の大思想家の普遍的意義の探究を擁護する立場からである。また、すでに我が国においても佐々木毅「政治思想史の方法と解釈

- Q. スキナーをめぐる』『国家学会雑誌』一九八一年、第九四巻、五七四—九二頁で、詳細に批判的に検討を加えている。なお、ダンの方法論（J. Dunn, "The Identity of the History of Ideas", in eds P. Laslett et al., *op. cit.*, pp. 158-73）は確かにスキナーの方法論と類似するが、ポーコックの方法論（*Politics, op. cit.*, pp. 3 ff.; "The History of Political Thought", *op. cit.* (1) の注 (2)）は歴史的研究の重要性を述べているものの、言語の多義性を指摘し、著者の意図した以上のことをテクストは語ることとしてスキナーを批判し（*Politics, op. cit.*, pp. 23 ff.）、思想家はテクストの歴史性だけでなく、論理性、哲理性にも注目すべきであると述べている。この点では後に述べる我々の方法と近い。スキナーもポーコックの方法を批判している（"Some Problems", p. 288）。なお、スキナーとポーコックの相違は Boucher, *op. cit.*, pp. 114-5 [note 9] を参照。
- (22) このような方法論が最も包括的に述べられた論文は、"Meaning" である。ただ、後の論文ではこのような基本的主張にふくむかの修正を加えている。
- (23) "Meaning", pp. 4 ff.
- (24) *Ibid.*, p. 50.
- (25) *The Foundations of Modern Political Thought*, vol. I (Cambridge, 1978), p. xiii. Cf. "Some Problems", pp. 289 ff.
- (26) "Meaning", pp. 39 ff.
- (27) "Conventions", p. 138.
- (28) "Limits", *passim*; "Meaning", p. 11.
- (29) "Meaning", pp. 52-3.
- (30) "Some Problems", pp. 281-3.
- (31) "Social Meaning", p. 142; "Some Problems", p. 283.
- (32) この点では、オースティンへのデリダの批判も参考にならう（J・カラー『ディスキュンストラクション』富山太佳夫、折島正司訳（岩波書店、一九八五年）、一七九頁以下参照）。
- (33) Cf. Lockyer, *op. cit.*, p. 206. 我々は後述するが、循環そのものを否定しようとするのではなく、
- (34) スキナーの "Conventions", pp. 134 ff. への問題を考察しているが、しかしその場合でも慣習の理解がまず必要だとはい
- (35) "Motives", p. 405; "Some Problems", p. 284; "Hermeneutics", p. 219. また、彼は著者の意図の理解だけがすべてであ

ると主張したことはないという (“Motives”, pp. 404-5; “Some Problems”, p. 283)。しかし、このことは後で述べる、最初の陳述に後に考えた意思を含める例のように我々には思える。

(36) オースティン、前掲書、一六、三八頁。

(37) “Conventions”, pp. 127-8.

(38) “Conventions”, pp. 128 ff.; “Some Problems”, pp. 288-9.

(39) 拙稿「アイロニーと政治——「ユートピア」解釈のために」『慶應義塾創立一二五年記念論文集——慶應法学会政治学関係』（慶應義塾大学法学部、一九八三年）、三一—二二頁参照。

(40) Gadamer, *Truth and Method*, op. cit. また、部分訳として、O・ベグラー編『解釈学の根本問題』（晃洋書房、一九八〇年）一七二—二二七頁、池上哲司、山本幾生訳がある。また、同様の解釈学としてP・リククル『解釈の革新』久米博他訳（白水社、一九七八年）も参照。スキナーも解釈学への関心を述べているが（“Hermeneutics”, etc.）、それはガダマールの解釈学ではなす。この点では、Gunnell, *Political Theory*, op. cit., pp. 96 ff.; idem, “Interpretation”, op. cit.; 佐々木、前掲論文も参照。

(41) R. Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature* (Princeton, 1979), pp. 315 ff. 異なる観点からであるが、福田敏一「日本における政治学史研究」（一九八四年二月二五日、東京大学政治学研究会）二二—二二頁はヨーロッパにおける政治学の概念の無自覚の連続観を指摘し、解釈学の「自閉的」傾向を批判している。

(42) この区別は、D. LaCapra, “Rethinking Intellectual History and Reading Texts”, in eds. *idem et al.*, op. cit., pp. 52 ff. をコンテキストとする。

(43) Gadamer, op. cit., pp. 91 ff., 333 ff.; Rorty, op. cit., pp. 389 ff.

(44) Gadamer, op. cit., p. 264; 邦訳、二〇〇頁。

(45) 丸山真男「思想の考え方について」、武田清子編『思想史の方法と対象——日本と西欧』（創文社、一九六一年）、二二—四頁。

(46) U・ヘーコ『開かれた作品』篠原資明・和田忠彦訳（青土社、一九八四年）。ただし、すべての独立した解釈に直接的に開かれているのはむしろ〈閉じた作品〉であるという逆説があるという（*The Role of the Reader: Explorations in the Semiotics of Texts* (Bloomington, 1979), p. 8）。

- (47) P・アリユス「心性史とは何か」、『教育』の誕生』中内敏夫、森田伸子訳（新評論、一九八三年）、一三一―五頁でフランソワ一世が情婦のもとから帰宅する途中、教会の鐘を聞き、敬虔な祈りを捧げたことは、当時の人間にとって自然であったと云い。
- (48) P・アリユス『子供』の誕生』杉山光信、杉山惠美子訳（みすず書房、一九八〇年）。
- (49) T. Hobbes, *Leviathan*, BK. I, ch. 8.
- (50) たとえば M. Ryan, *Marrism and Deconstruction: A Critical Articulation* (Baltimore, 1982), pp. 2 ff. だが、ホップスのメタファーの排除は一義的、絶対的な主権を確立するものと考えるが、そのような試みが反乱としてのメタファーを生じやせざる考やうが、また、同様で Paul de Man, "The Epistemology of Metaphor", in ed. S. Saacks, *On Metaphor* (Chicago, 1978), pp. 12 ff. (rep. in ed. M. Shapiro, *op. cit.*, pp. 196 ff.) や、ロマンの *Essay Concerning Human Understanding*, Bk. 3, ch. 10 のレトリック批判でもかかわり、認識論を通じてメタファーを用いようとすることを指摘してやう。
- (51) たとえば、つわゆる実証的歴史記述をめぐって意識をわけていくなぐとも比喩的表現が用いられてやうが、H. White, *Topics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* (Baltimore, 1978), pp. 101-20. を参照。
- (52) 古典的レトリック理論でやうば無数にやうる比喩表現を類型化する試みはこころではなされなう。有名な R・ヤコブソンのメタファーとメトノミー（換喩）の二分化（『一般言語学』川本英雄監修（みすず書房、一九七三年）、二二頁以下）やグループのシネドック（提喩）による一元化（『一般修辞学』（大修館書店、一九八一年）等）があるが、我々はメタファーを代表的比喩の一つとして分析するだけにとどめておきたう。
- (53) M. Black, *Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy* (Ithaca, 1962), pp. 25-47; idem, "More about Metaphor", in ed. A. Ortony, *Metaphor and Thought* (Cambridge, 1979), pp. 19-43.
- (54) I・A・リチャーズ『新修辞学原論』石橋幸太郎訳（南雲堂、一九七八年）、八二頁以下。
- (55) P・リクール『生きた隠喩』久米博訳（岩波書店、一九八四年）、三二―三三頁に『緊張理論』の要約がある。なお、この本は現在のところやまやまなメタファー理論に関する最も包括的な研究である。外に、このような緊張を強調するものとして、P. Wheelwright, *Metaphor and Reality* (Bloomington, 1968); M. C. Beardsley, "The Metaphorical Twist", *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 22 (1962), pp. 293-307; D. Berggren, "The Use and Abuse of Metaphor", *Review of Metaphysics*, vol. 16 (1962), pp. 237-58 & vol. 17 (1963), pp. 450-72; C. M. Turbayne, *The Myth of Metaphor* (Columbia,

- S.C., 1970) 等がある。なか、政治理論に关するは E. Zashir & P. C. Chapman, "The Use of Metaphor and Analogy: Toward a Renewal of Political Language", *Journal of Politics*, vol. 36 (1974), pp. 290-326 及び「一致の体系的断言」をカントーの特徴とする M. ステンハーの主張 (未見) を用いて、カントーの創造性を強調する「暴張理論」を唱えている。
- (95) Black, *Models and Metaphors*, op. cit., pp. 236 ff.
- (96) Cf. Bergerer, op. cit.; Turbayne, op. cit.; R. A. Nisbet, *Social Change and History* (Oxford, 1969), pp. 3 ff.; R. H. Brown, *A Poetic for Sociology: Toward a Logic of Discovery for the Human Sciences* (Cambridge, 1977), pp. 77 ff.; W. M. エリアス『ユリイダと意味』滝浦静雄訳 (岩波書店、一九八〇年)、二二七頁以下等。
- (98) 今井ひろびな文獻の外に W. Ember, "Metaphor and Social Belief", in ed. S. I. Hayakawa, *Language, Meaning and Maturing* (New York, 1954), pp. 125-38; M. Landau, "On the Use of Metaphor in Political Analysis", *Social Research*, vol. 28 (1961), pp. 331-53; M. Walzer, "On the Role of Symbolism in Political Thought", *Political Science Quarterly*, vol. 82 (1967), pp. 191-204; H. M. Drucker, "Just Analogies?: The Place of Analogies in Political Thinking", *Political Studies*, vol. 18 (1970), pp. 448-60; E. F. Miller, "Metaphor and Political Knowledge", *American Political Science Review*, vol. 73 (1979), pp. 155-170; G. Saccerro-Battisti, "Changing Metaphors of Political Structures", *Journal of the History of Ideas*, vol. 44 (1983), pp. 31-54; J. Rayner, "Between Meaning and Event: An Historical Approach to Political Metaphors", *Political Studies*, vol. 32 (1984), 537-50 等参照。
- (99) V. ターナー『象徴と社会』梶原景昭訳 (紀伊国屋書店、一九八一年)、二七頁以下参照。
- (98) ターンもこのような考えを唱えている。T. S. Kuhn, "Metaphor in Science", in ed. A. Ortony, op. cit., pp. 409-19; 高 山太佳夫訳『現代思想』一九八四年五月、八〇—九頁。
- (91) P. リククール、前掲書、三八〇頁以下参照。
- (92) 丸山真男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会、一九五二年)、二二二頁以下、福田歓一『近代政治原理成立史序説』(岩波書店、一九七一年)、同『近代の政治思想』(岩波書店、一九七〇年)等。
- (93) Black, op. cit., pp. 40 ff.
- (94) 拙稿「自然学・魔術・政治学あるいは F. ホーコンの政治思想」、『思想』一九八五年六月。
- (95) 柄谷行人『隠喩としての建築』(講談社、一九八三年)五六頁以下参照。

(66) M. Oakeshott, "The Voice of Poetry in the Conversation of Mankind", in *Rationalism in Politics and Other Essays* (London, 1962), pp. 197-247. #247. Dalimayr, *op. cit.*, pp. 183 ff. を参照。

三

さて、以上の考察によって我々の考える政治思想の方法と、それと関連するその研究の意義をある程度示しえたと思う。もちろん、すでに述べたように、我々の主張はあくまでスケッチにすぎず、また新しいものではなく、今までさまざまな立場から主張され、実際に試みられていたことを、新しい用語で述べただけにすぎないかもしれない。特に、政治をレトリック的に考えることは社会や思想に対する記号論的、象徴論的アプローチの中に包括されるかもしれない。また、我々が現代の知をできる限り相対化していこうとする視点は容易に相対主義であるという批判もよう。この点では我々はさらに論理的にこの試論をつめていく必要がある、もっとポジティブなことをさらに語っていかねなければならないが、少なくとも、政治思想を研究することは過去と現在との対話であり、我々はその両方に対して距離を置かない限り、つまりそれらを自明のものともみなさない限り、先へは進めないことを主張しておきたい。

さて、我々の試論はタイトルにかかげた 'vocation' 'vacation' への回答となったであろうか。他の政治思想を「職業」とする者にとっても、またそれ以外の政治学者にも、我々の主張は文字通り言葉の遊びをする「休暇」としか思えなかつたかもしれない。しかし、最後にまた言葉だけをいじり回すものに思われるかもしれないが、我々のめざすものはたとえ、現在の学問や現実に対して距離を置くことが「休暇」、レクリエーション (recreation) と思われようとも、そのことが同時にリークリエーション (re-creation) を可能にしていくことであると主張したい。